

雲南ペー族の正月「ゾウワー」と 神像呪符「甲馬子」にみる春節の神々

川野 明正

一・ペー族の概要

本論は鈴木健之氏の扱う漢族の春節と鈴木正崇氏の扱うミャオ族の正月に対し、中間的な事例として、漢文化の強い影響下にある少数民族、ペー族の春節「ゾウワー」を扱う。

ペー族は白族と表記し、自称は「ペーホー」「ペーニー」で「白人」の意味である。中国雲南省西部、大理白族自治州を中心に居住し、二〇〇〇年の統計では人口一八五万八千人。言語はチベット・漢語族チベット・ビルマ語派ペー語支に属する。貴州省畢節地区、四川省西昌市、湖南省桑植県、ミャンマー北部などにも少数が居住する。

ペー族は大理州一帯の土着の民族で、唐代の南詔国・宋代の大理国の主要な民族を構成した白蛮の末裔であり、明代以降大量に辺疆防衛などで雲南省に移住してきた漢人（現在の漢族）からは「民家」（土着民の意・漢人を「軍戸」とするに對する）

と呼ばれた。

ペー族は、旧曆六月二十五日に行われる火把節フウオパーチイ（たいまつ祭り・ペー族語シーホイチイエー・以下雲南漢語はルビ、ペー族語はかっこ内に表記する）など、イ族・ナシ族・リス族など、四川省南部や雲南省の山岳地帯に居住するチベット・ビルマ語派イ語支の諸民族とも共通する風俗習慣をもつ一方、外来文化の受容に長ける。とくに漢文化との関係では、明・清代にかけて、私塾や書院で四書五経などの漢籍を学び、科挙を受験して官僚になる者も多く、民居の壁面に漢詩文や中国伝統絵画を書きつけ、柱や門扉の各所には中国の伝統的な対句である対聯を貼るなど、強い影響を受ける。言語的にもペー族語は、他のチベット・ビルマ語派の言語がSOV形式を取るのに対して、漢語と同じSVO形式である。

年中行事は火把節のほか、村落の守護神である本主ベンツイ（ウズ）を村毎に祭祀する本主節や、旧曆三月に行われる交易市サンユガイ「三月街」（サーワーズー）、旧曆四月に行われる巡礼行事ラオサンリン「繞三靈」（グウェサラー）など、ペー族独自の年中行事も多いが、漢族と同じ伝統的な農暦に基づき、旧曆一月の春節（以下旧曆による）・四月の墓参行事である清明節・五月五日の端午節・七月の祖先祭祀、八月十五日の中秋節、九月九日の重陽節、十一月の冬至節、十二月末の竈神送りの行事など、内地の漢族が行う主な節句はペー族にもみられる。

二・ペー族の春節「ゾウワー」

ペー族は正月を「ゾウワー」と呼ぶ。「春月」と表記し、漢族の「春節」に相当する。以下、語彙的にも漢語の借用が多く、漢文化の影響が強い大理州大理市のペー族の習俗を記す。他地のペー族からは「ハベニー」〔漢白人〕つまり「漢化したペー族の意」と呼ばれることもある。雲南第二の湖、洱海の北端に位置するペー族村、上沙坪村（約六百戸・秦家と楊家が大部を占める）で二〇〇七年八月に取材したが、同村の属する江尾郷一带は、本論で紹介する神像呪符に関して、ペー族では最大の生産・販売地の一つである。同村の沈林花さん（女性・古物販売・四二歳）に取材し、兄の沈祖林さん（男・古物販売・四六歳）からも教示を受けた。

年の暮れ、竈神が天に上がり、天上の朝廷に君臨する玉皇大帝に一家の一年の行いを報告するが、この時期位に年越しの準備がはじまり、魚や肉などは年越し前に準備する。竈神を送る日は、年末の二十三日で、「拜竈君老爺」（ペーツォグラーオイェー）の儀式を行う。ただ、竈神の神像に水飴を塗り、天までの家の悪口を防ぐ内地の習俗は、今日でも大理市にもみられるが、家では行わない。竈神を天に送る藁馬も用いない。

年越しの晩「三十晚上」（サツニベクー）は、よいものを食べ、旧時はこの日のみ豚肉も膳に並べた。豊かな家庭では、一年に一度、年越しの準備に服を一揃え新調した。年越し前には、

家の掃除をし、埃をすべて外に出す。またふだん足を洗わない人も、この日だけは足を洗い、頭も洗う。

晩に「拜天」（ベヘモー）といい、中庭に祭卓を出し、香を焚き、酒・茶や肉料理、一對の魚、白飯、緑や紅色のあられを並べ、家長を筆頭に天界の諸神を拝む（家の東側の壁の上に神棚があり、天神の牌位が貼られる）。頭を地につける「叩頭」の動作を三回繰り返す。紙の模造銭「紙銭」と天地神の凶像も燃やす。祖先の牌位も拝む。

年が明けるとすぐに家を出て、井戸水を汲みに行く。若水とは「なんでも善いものが家に入る」意味で、村の者競って井戸の前にならぶ。井戸端で井戸を守る「井水龍王」に練香を捧げる。同じく旧きを捨て、新しきを尊ぶ意味では、母屋中央の客間に青い松葉を敷きつめるが、「青青松松」が「輕輕鬆鬆」に通じ、「輕輕でよい気分」の掛詞でもある。寝る前に門を閉じる（封門）。門扉を守る門神に練香を捧げる。

元旦は「正月初一」（ツェンワーウイー）といい、朝、六時ごろ起き開門する。「大門大大開、金銀財宝滾進來、滾進不滾出、滾得滿堂屋」（「表門は大きく開き、金銀財宝がころがりこむ、ころがりこんででていかず、それで部屋中いっぱい」と）と唱える。

朝は村神を祭祀する本主廟に線香をあげる者もいる。また、朝に竈神は天から帰って来、神像を新しくする。村で龍踊り「耍龍」（スワヌー）と劇を歌い踊るが、龍踊りは村中を練り歩き、

また個別の家に招かれて踊り、おひねりをもらう。正月十五日は「元宵節」(ドゥーザーニー)で、この村ではこの日、胡桃と黒砂糖を入れた団子、元宵を食べる。内地と同じく夜に灯笼を家門に掲げる風習が大理市内にもあるが、ここでは行わない。

三・神像呪符「甲馬子」にみる春節の神々

雲南省には「甲馬子」^{ジャマージ}と呼ばれる祭祀用の木版画が各地にある。年中行事・祭祀儀礼・日常の祈願に使われ、祈願を送り届けるため、粗末な雑紙に刷られ、祭祀後燃やして煙にする。この種の神像呪符は「紙馬」^{チマ}「神馬」^{シマ}ともいい、元来中国各地で「広くみられ、春節前後は竈神・門神・天地諸神や開運の吉祥版画が使われた(川野明正『神像呪符(甲馬子)』集成——中国雲南省漢族・白族民間信仰誌」に詳しい)。南宋・孟元老『東京夢華錄』巻十「十二月」「交年節」に「二十四日は交年節で、市民は夜になると僧侶や道士を招いて読経をしてもらい、酒や果物をしつらえて神送りをし、家じゅうのものや紙代と紙銭とを焼き、また竈の神の像を竈に貼り、酒粕を竈の口に塗りつける。これを「酔司命」という」と記し、同書同巻「除夜」に「歳暮に近づくと、街ではどこでも門神・鍾馗・桃板、桃符や、財門鈍驢や回頭鹿馬や天行帖子を印刷したのを売りだす」と記すが如きである。文化大革命以降神像呪符は、一部を除きほぼ消滅したが、雲南省では現在でも日常祭祀に用い、貴重な民俗資



fig.3(天地之神) (洱源县江尾郷・雑紙墨刷—11.6cm × 11.5cm)



fig.2(三界神威聖神總真) (大理市太和村・白紙墨刷—22.0cm × 17.2cm)



fig.1(竈君) (洱源县江尾郷・紅紙墨刷—22.0cm × 12.6cm)

料である。

①(竈君) (灶) 竈神の神像は、他地では夫人一人か、妻妾二人とともに男性の竈神を描くことが多く、雲南省は男性一人の立像が多い点の特徴である。

②(三界神威聖神總真) (真) (天地之神) (天) (地) かつて内地では数多の天神地祇を描く神像版画があり、新年の神迎えの依代とした。一方この(三界神威聖神總真)は本主(村神)の祭祀秩

序を描き、本主信仰の内容に入れ替わっている。「天地之神」は女性
の天神が空に羽ばたいて浮き、ペー族の天神信仰を表現している。

③ 〈血神之神〉 (Fig. 4)



fig.4 〈血神之神〉 (洱源县江尾郷・雑紙墨刷—12.6 cm × 12.3 cm)

旧時年越し前に各地に「窮鬼」、つまり貧乏神を送る「送窮」の儀式があった(唐代の韓愈に「送窮文」がある)。唐代の『四時宝鑑』は、「高陽氏(伝説の王、顓頊氏)の子、好んで弊を衣、糜を食す。正

月晦日、巷に死す。世々糜を作り破衣を棄て、是の日巷に祝し、貧を除くという」とある。雲南省では清代までこの行事を疫病神を送る儀式とし、正月一日に小豆粥を門前の路上に播いて疫病神を送った。ただし、疫病神は顓頊氏の子ではなく、共工氏の子という。永尾龍造『支那民俗誌』第一巻は「共工氏に七人の子があったが、みな不才子で流落して瘟疫を世間に伝播して人を苦しめた」とする(同書 二四〇頁)。「血神」は難産死した小児の霊で、襁褓を纏った小児に雲南の疫病神の観念がある。

④ 〈青姑娘娘〉 (Fig. 5)

永尾龍造『支那民俗誌』第二巻は剣川県の「淹磬姑娘」の女神伝説を記す。この女神は正月十五日の元宵節の夜に糞堆に跳



fig.5 〈青姑娘娘〉 (洱源县江尾郷・雑紙墨刷—13.3 cm × 11.5 cm)

び込んで死んだ娘である。「附近の婦人たちはその死を悼んで、其の命日たる元宵の夜、草束を以て人形を作り、長香を焚いて之を吊ひ、街中を練り歩い

て河畔に行き、口々に唱へごとをして、終りに人形の衣裳を以て河中に投ずる習慣が起こつた」(同書 五四〇頁)。剣川県甸南鎮では「青姑娘娘」ともいい、幼い男子に将来の嫁として家に入り労働する「童養媳」が、嫁いびりの末川に飛び込み自殺したとして「青姑娘娘節」がある。元宵節の日、中国各地では晩に便所の神、紫姑娘娘を祭祀する。六朝宋・劉敬叔「異苑」に憤死した妾を正月十五日に人形を作って招霊し、便所や豚小屋で占う旨記し、六朝梁宗懐「荆楚歲時記」は「その夕に紫姑を迎え、もつて将来の蚕桑を卜し、ならびに農事を占う」と書く。箕と箒や芥・しゃもじで神体をつくり、問答し、神体が動き神託する。糞堆に死んだ淹磬姑娘は、占いの要素はないが、紫姑娘娘の行事の影響がある。「老人が眼鏡をかけているときに、眼鏡に遮られて見えな」とい、悪戯をし、卓上の菓子を取って食べた。老人は見ぬ風をして眼鏡を置いて立

ち去った。娘はその眼鏡を掛けてみると、思いがけなくよく見えるので娘は驚いて恥じてそのまま庭に駆けだして糞堆の中に身を投じて死んでしまった」(前掲書 五四〇頁)。「滝聲」^{イェンチン}と「眼鏡」は同音なので、この伝説が生じたものである。

⑤ 〈当年太歳〉 (fig. 6)

土地祭祀の際に土中の凶神として畏れられる〈当年太歳〉を祭祀



fig.6 〈当年太歳〉 (洱源县江尾郷・雑紙墨刷—14.0 cm × 12.1 cm)

道を反対に回るとされる架空の星である。

するが、その形象は、迎春行事である「打春牛」の儀礼や曆書の表紙に描かれていた春牛の形象を反映しており、歳神としての太歳を描く。歳星(木星)の軌

四・結論

上沙坪村のペー族の春節は一瞥するに漢族の春節習俗と大同小異で、本主廟詣でや、若水や青松のみにペー族独特の習俗が窺えるかみえる。しかし神像呪符の民俗神は、〈三界神威聖神総真〉が漢族の天神地祇ではなく、春節の本主廟詣でがあるペー族の村神、本主の諸神の祭祀秩序に換骨奪胎されるなど、

多くの神像は本来の意味とは異なって理解され、ペー族自身の祭祀秩序や祭祀目的に従う。これは誤解の結果ではなく、再解的の意味賦与の行為といえ、漢族の風俗習慣に倣いつつも、じつはペー族の風俗習慣のコンテクストに根を下ろした内実をもつ。漢文化の強い影響を受けつつも、ペー族の信仰世界は漢文化に対して二重性を保ち、根底には独自の世界観が確乎として息づいている。

参考文献

川野明正 『神像呪符「甲馬子」集成——中国雲南省漢族・白族民間信仰集成』二〇〇五 東方出版

永尾龍造 『支那民俗誌』第一卷 一九四〇 支那民俗誌刊行

会

永尾龍造 『支那民俗誌』第二卷 一九四一 支那民俗誌刊行

会

楊憲典・杜乙簡・張錫祿 「大理白族節日盛會調査」 雲南省

編写組 『白族社会歴史調査(三)』一九八三 雲南人民出版社

版社

張文勳・張福三・傅光宇 『白族文学史』一九八三 雲南人民

出版社(一九五九年の修訂版)

(かわの・あきまさ/東京理科大学)